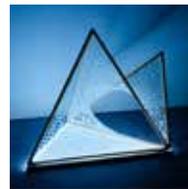


支持される伝統工芸へ あくなき挑戦者たちは今。

佐藤友佳理
和紙作家
(写真 右)



DRESS

山本和哉
砥部焼作家
(写真 中央)



tension

西原悟志
竹工芸師
(写真 左)



てまり

「RAFTED」それはレクサスが大切にする、日本ならではのモノづくりの姿勢や精神

2016年より日本各地で新たなモノづくりの挑む若き「匠」約150名を支援してきた「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」。今秋、京都でプロジェクト初となる展覧会「TAKUMI CRAFT CONNECTION - KYOTO by LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」が開催される。展覧会を前に、歴代の愛媛県選出の3人の匠に、日々のモノづくりに対する姿勢や想い、本プロジェクトを機に取り組んだ新たな挑戦やこだわりについて聞いた。

デジタルと伝統技法を融合した和紙プロダクト

木枠に糸を張り、和紙をすき込む独自の手法で、主に宿泊施設や店舗などの上質な空間を演出するオブジェを制作してきた佐藤さん。匠に選出された際に考案したのは、和紙を使った和室にも洋室にも合う照明だ。直線的

砥部の土にこだわり新たな器の魅力を創造

常にオリジナリティーあふれる砥部焼を模索する山本さん。プロジェクトでは、「エチュード模様」と呼ばれる独自の黒く滑らかな文様をシャープな形状の器に描き、軟らかさと硬さの対比がユニークな食器を生み出した。これまで、自らの感覚で造形や絵付けを行うことが多かった山本さんだが、プロジェクトでは誰がどのように使うか、ユーザー像を明確に絞り込んだ。イメージしたのは、カジュアルなフレンチレストラン。そこに集うお客さんが驚きをもって見て楽しめるような器を目指した。また、ロクロで成形したものと、切ったパーツをつなげて一つの焼き物を作るといった技法にも挑戦。プロジェクトへの参加は、ターゲットを想定し、より一層市場が求める商品をいかにして生み出すか試行する契機となった。「地域性をいかに表現していくかは今後の課題」と話す山本さんだが、砥部焼の原点である砥部の土には並々ならぬこだわりを持つ。産地の素材を大切にしながらも、新たな造形への挑戦は止まらない。

戦略的なマーケティングで次代の竹工芸を目指す

「竹細工の魅力をもっと若い人に伝えられなければ、竹工芸の未来はない」と話す西原さん。カゴやザルなど従来の竹細工から脱却を図り、これまでのターゲット層である40代以上の女性から、30代以下の女性へと焦点を絞るため、プロジェクトでは、これまで使うことのなかった金具や布といった異素材との組み合わせにチャレンジし、球体のパーティーバッグ「てまり」を制作した。さらに、「てまり」を改良し、30代女性向けの商品を企画。一つの商品ブランドとして確立させ、アパレル業界への参入を画策している。また、市内で開催している竹工芸教室に加え、動画配信サイトを使った動画教室も始動。2人の弟子に加え、地元の竹工芸師同士のネットワークを作り、チームで制作を行うことで、愛媛が竹細工の一大産地となるようにしたいと意欲に燃える。作るものには「こだわりのないのが自分のこだわり。自分は作家ではなく、お客さんが欲しいものを作る一職人」と言う西原さんだが、その動きはいわゆる昔ながらの職人の枠を飛び越え、軽やかに、だが戦略的に次代を見据えている。



47都道府県150人。
若き匠の技と感性が交わる3日間。

主催：LEXUS 共催：京都市、京都新聞、LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

レクサスは愛媛県の匠をサポートしました。 <https://lexus.jp/>

